



浄土真宗西福寺別院 熟柿庵
令和八年七月 第四百十三号

うつとうしい梅雨の中、皆様いかがお過ごしでしょうか。

異常気象が進行して、日本の四季が崩れつつあるという話を聞いているせいでしょうか、今年もちゃんと梅雨の季節が来たんだという奇妙な安堵感が少しあります。

謎の男の子

近所の路地を入ったところに、少し古びた小さな一軒家の食堂があつて、昼過ぎひとりで定食を食べていました。ほかにお客はいなくて、そろそろ中休みかなという時間に、ガラツと入口が開いて、小学生らしき男の子が入ってきました。その子はいつものことに、入り口でお店の人となにげない立ち話を親しげにして、「じゃ、帰るね」と言つて帰っていきました。お店の人は丁寧に対応してあげて「気をつけて帰るなさいね」と見送りました。このお店は母親と娘さんの二人でやっていて、子供が帰ったあと、その娘さんに思わず「お子さんですか」と聞いてしまいました。

昔、昭和の頃テレビのホームドラマで、親が自宅とは別の場所でお店をやつていて、子供が学校帰りにそこへ立ち寄つて帰っていく、そんなシーンがあつたことを思い出して、失礼ながら聞いてしまいました。

ところが娘さんが云うには「全然知らない子なんですよ、名前も、どこに住んでいるかもわからないんです、最近顔を出すようになったんです。私たちも驚いているんですよ」とのこと。

私も少し驚きました。見ず知らずの子供がわざわざお店に顔を出して、お店の人と何気ない会話をして帰っていく。いったいどういうきっかけでこんな素敵な関係になったのでしょうか。今どきの幼稚園や小学校では、子供たちに「知らない人に声をかけられたら返事してはいけませんよ」などと教えていると聞きます。そんなご時世での今回の出来事だったので、その光景に立ち会えて、私の心も少し和らぎました。

親子でなくても、大人と幼い子供たちの信頼関係や会話は大切だなとあらためて感じた次第です。今年の心に残る出来事のひとつになりそうです。

人工知能（AI）

先日、読売ジャイアンツの阿部監督が自分の娘に暴力をふるい、娘がスマホのAIに相談したら「児童相談所に連絡しなさい」と言われ、児童相談所から警察に連絡がいつて、父親の阿部監督が逮捕された、という事件がありました。この中でいちばん気にか

かったのは、高校生の娘がAIに相談したことです。最初は「へー、最近の若者は家庭内のもめごとでも人工知能に相談するんだ」と奇異な感じがしました。

その後、檀家さん宅にお参りに行つては、この話を話題にしました。そして檀家さんからいろんなお話を聞くことができました。ある人は、ご高齢の方で、何かの研究をしておられて、「毎月、五万円と十万円の使用料を払って、有料のチャットGPTなどを活用しております。秘書を雇うよりよほど安く効率的です。時々、AI同士を論争させて答えをみちびきたりしてます。仏教だって最近、仏教書をことごとく入力して、どんな悩みも仏教的に即答してくれるAIができました。武田さんも使ってみれば？」とのこと。

また会社の総務部に勤めているというAIにくわしい現役の方の話によると、「AIの中に、架空の相談相手をつくって、その相手に自分の性格や周りの環境、ふだん自分が考えていることなどをとことん教え込んで、自分を理解してもらい、人生の悩みをそのAIの仮想相手に相談している若者が想像以上にたくさんいます。」とのこと。親よりも友人よりも、そのAIは自分のことを人間以上によく知っていて頼りになるらしいです。

そういえば、最近アメリカで少年がAIに相談して、AIの答えにしたがって親を殺そうとしたり、自殺したりする事件が起きて、裁判沙汰になっているという話を聞きます。

私もために無料のAIに相談してみました。その返事は「あなたの悩みはとても鋭くて深く、よくわかります」という言葉から始まりました。私に寄り添うふりをするのです。思わず前のめりになってしまいます。

今後、人工知能は人間や社会にどのような影響をあたえていくのでしょうか。ちよつと見当が付きません。

人工知能は人間を超えるか

AIはいずれ、人間を超える能力、意識や考えをもつて自立するのではないか、そんな時代が来るかもしれない、と危惧されています。でも私はそうは思っていません。

人間というのは本来ぐちゃぐちゃとしたカオス（混沌）のような言語化できない生き物です。それは私にもわからない。しかし私の本体です。それが言葉を持つようになつて、文字を使うようになって、カオスが無理やり整理されて言葉になり理屈が生まれ、記号になっていきます。いわゆる「情報」として表面化されます。こうなってしまうと、その情報は私自身ではなく、私を色メガネでとらえた何か別の私です。コンピューターや人工知能は情報を通してしか私をとらえることができます。

たとえば、病院の診察室で、患者さんの前で、医者がパソコンばかり見ている。そこには、患者さんの検査結果の数値ばかりが並んでいる。その数値を見て、医者は病名を判断する。生身の患者さんがそばにいるのに、まるで見ようとしていない。患っているのは患者さんなのに顔色すら見ようとしていない。そんな感じです。患者さんはパソコン

ンの中にはいません。

人工知能は情報を越えて、人間の本体をとらえたり、複雑怪奇な人間の頭脳を超えることなどではしない、それが今の私の結論です。

親鸞聖人の言葉（その一）

げんそうえこう
還相回向

人は死んだらどうなるのか。身近な人が亡くなると、その人が思っていたことや人生で経験したことなどが、いったいどこへ行ってしまうのだろうか、などと考えたりしております。

思えば多くの身近な人の死を経験してきました。親であったり、友人であったり、恩師であったり。そのたびに心が碎けるほど悲しんだり、精神のバランスが崩れたりしました。だけど時がたつにつれて、日常生活に戻っていくなかで、しだいにその人の亡くなったことへの悲しみに慣れて、だんだん消えることなく今に至りました。しかしその悲しみも、私が老化していくなかで、しばらくでいきます。そして亡くなった人の記憶も薄れていきます。そして私自身が死に近づきつつあり、多くの人を見送った私自身もこの世から消えていきます。永六輔さんの言葉だったでしょうか、「人は二度死ぬ」という表現があります。二度目の死は、その人の死すら忘れられていくことなのではないでしょうか。

人の死とはそういうものなのでしょうか。あいまいな人間の記憶や思い出の中だけのものになっていくのでしょうか。親鸞聖人は、死とはそんなものではないと「還相回向」のなかで語っておられます。

「還相回向」のもとの意味は、曇鸞大師どんらんの『浄土論註』によると、この世を終えて、浄土へ行った人が、ふたたび煩惱だらけのこの世に帰ってきて、人を浄土へと導いていく、ということです。

私は当初、死んだ人が再びこの世へ帰ってくるわけないでしょ、などと思っていたのですが、それは私の浅はかな知恵でした。私の理屈で考えだされた表面的な理解に過ぎませんでした。

私の命や思いは、この世でご縁をいただいて、別れていった人たちの命と受けを受け継いでいるのです。あの人と親子として、友人として、師弟として出会わなければ、今ここに生きている私は存在しないのです。これが還相回向であり、仏様のはたらきであって、途切れることのない自然（じねん）のはたらきです。このはたらきは、私の意識や思いを越えています。意識でとらえて表現できるようなものではありません。

世間でよく「皆さんのおかげで今の私があります」などという言葉を耳にしますが、

それは一時期、私の意識がそのように思わせるだけで、今の自分が幸せであるという前提で、その元をたどれば、そういうご縁があったからだと思っているにすぎないのです。

私の命は、私の意識や思いをこえて、生まれ変わり、死に変わりしている。

親鸞聖人はそのことを「一切の有情はみなもつて世々生々の父母兄弟なり」と表現しておられます。

《お知らせ》

盆会法要のご案内

七月十八日（土曜日）午前十時から盆会法要を勤修いたします。みな様のご参詣をお待ち申し上げます。

なお、法要後、いつものように談話会を予定しております。飲み物と少しの粗飯を用意しておきます。お時間が許せる方はご参加ください。